

ITEMⁱⁿJRC 2012

2012 国際医用画像総合展

未来への先導 — 放射線診療の核心に迫り未来を展望する
— *Design the Future of Radiology* —

2012国際医用画像総合展 (ITEM in JRC 2012) は、4月13日(金)～15日(日)の3日間、パシフィコ横浜展示ホールB、C、Dにおいて開催された。JRCの中で最も賑やかな会場内には、142の企業と海外学会1団体が出展。運営を担当する一般社団法人日本画像医療システム工業会 (JIRA) は、出展総面積が1万6700m²となったと発表した。初日13日の9時30分からは、恒例の開会式がITEM会場の正門前で行われた。

JRC 2012 最終日の合同閉会式では、JIRAの加藤久豊会長から、3日間で2万1782人が来場したことが発表された。内訳は学会登録者としてJRS会員が2915人、JSRT会員が4121人、JSMP会員が613人、その他が873人の計8522人。当日入場者として医師が447人、技師が4504人、医療従事者が715人、教育研究者・学生が376人、出展・同業者が4200人、その他が3018人の計1万3260人となっている。2010年の入場者数2万977人と比して103.8%となっており、ここ5年間で2番目に多い数字を記録した。

2年ぶりの開催となったことから、新製品の発表や初めて展示される製品が多かったことが要因として挙げられる。さらには、2012年度の診療報酬改定により、従来機種からの更新需要が高まっ

ていることも、来場者数の増加に結びついていると思われる。また、東日本大震災の影響を受けて、BCP(事業継続計画)の一環として、医用画像保管のクラウド化が注目を集めているが、PACSを扱うメーカーの多くが、クラウドサービスの提供を開始したことも、来場者の関心を集めていた。

被ばく低減技術が進化し コストパフォーマンスに優れた製品が登場したCT

医療被ばくへの国民の関心が高まっている中、CTでは、被ばく低減が大きなテーマとなっている。メーカー各社は、従来のFBP法に代わるIR法(逐次近似法)を応用した画像再構成法による画質と被ばく低減の両立に取り組んでいるが、ITEM会場内でもその最新技術が紹介された。

東芝メディカルシステムズは、「Aquilion ONE」と80列「Aquilion PRIME」、16列「Alexion」を展示した。Aquilion PRIMEはITEM初出展となる。同社は被ばく低減技術である“AIDR”の最新版である“AIDR 3D”を紹介した。再構成時間がほとんど変わらずに、最大でノイズを50%、被ばく量を75%低減する。同社は今後、Aquilionシリーズすべてに、この技術を搭載することになっている。

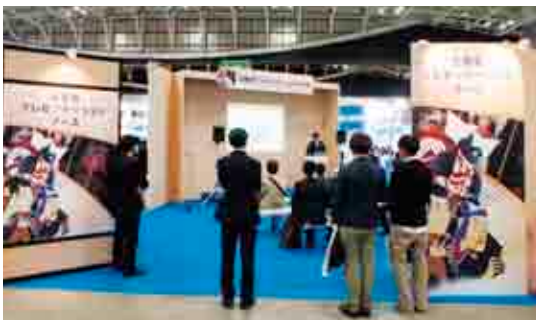
フィリップスエレクトロニクスジャパンは、2011年発売の「Ingenuity CT」を展示したほか、“Superb IQ (Image quality)”というコンセプトを紹介した。このコンセプトのコアテクノロジーが被ばく低減技術の“iDose⁴”である。iDose⁴では、7段階のレベル調整ができ、被ばく線量を最大80%低減。高分解能撮影においても、微細構造を明瞭に描出することが可能である。

診療報酬改定を受けて新規導入、更新需要の増加が予想されるが、シーメンス・ジャパンは日本の医療環境にマッチした64スライスCTの「SOMATOM Perspective」を発表した。設置面積18.5m²というコンパクト設計で、低ランニングコストを実現する“eMode”を搭載。逐次近似法を応用した再構成法である“SAFIRE”を採用している。

GEヘルスケア・ジャパンは、診療所や中小規模病院など設置スペースの限られた施設でも導入しやすい16列の「Brivo CT 385」を発表した。高齢者などの検査が容易に行えることをコンセプトに開発されており、シングルスライスCTと同じ40/30kVAの電源で使用できる。日本国内で開発・製造し世界で展開する、“IJFG (In Japan For Global)”製品の1つと同社では位置づけている。



3日間で2万1782人が来場したITEM会場



会場内に設けられた主催者プレゼンテーションブース